

こどもも、おとなも
みんなつかえる！

こども環境白書



もくじ

はじめに	1
わたしたちの未来は大丈夫？	2
世界の国々が力を合わせ、危機に立ち向かう	4
今、日本で何が起きているのか	6
わたしたちの身のまわりの自然では何が起きているの？	8
豊かな暮らしを続けるために	10
持続可能な社会に向けた地域づくり	12
わたしたちのまわりにある地域の資源	14
変わりつつあるわたしたちの暮らし方	16
地域づくりに向けたみんなの取組	18
ライフスタイルを変えよう！	22
みんなで取組を始めよう！	24
おわりに	26
この冊子の目的と使い方	28

本書を読む前に

Q **「環境」**って何？

A 空気、水、生き物、天気や気候・・・わたしたちの生活に関わり、わたしたちの周りにあるもの、すべてが「環境」です。環境は、みなさんが安心して毎日を暮らすために、とても大切なものです。



Q **「環境省」**ってどんなところ？

A 環境省は日本のため、そして地球のために、様々な環境の問題に対応し、今の環境を未来につなげるための仕事をしている国の機関です。



はじめに

「^{かんきょう}こども環境白書」は、^{かんきょうしょう}環境省が毎年作成する「^{かんきょう}環境白書」を基に、主に小学校高学年以上のおみなさんに、今、^{かんきょう}起きている環境問題を^{りかい}分かりやすく理解していただくために作られています。

^{かんきょう}環境問題に取り組むための4つのステップ

→ : 次のステップに進む

●●● : step 1 にもどる

step 1 問題に^{かんきょう}気づこう
こども^{かんきょう}環境白書で自分の暮らしが^{かんきょう}環境問題につながっていることに気づく。



step 2 問題をよく^{かんきょう}調べよう
気付いた問題のことをこども^{かんきょう}環境白書などで調べてみよう。



step 4 できることを^{かんきょう}実行しよう
学校や家、自分でできることを実行してみよう。

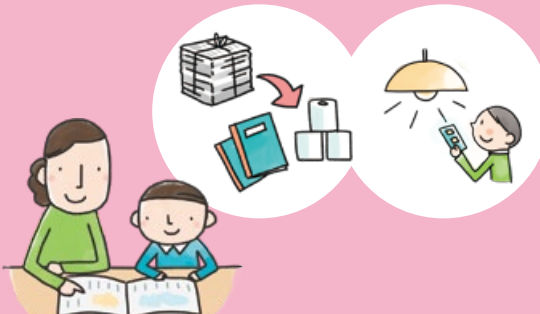
自分で…

家で…

学校で…



step 3 何が^{かんきょう}できるか考えよう
こども^{かんきょう}環境白書からできることを探したり、周りの人と話し合ったりして、できることを考えてみよう。



どんな^{かんきょう}環境問題でもこの4つのステップで取り組んでみるといいだね！

何か新しいことに気付いたら step 1 にもどってみよう！

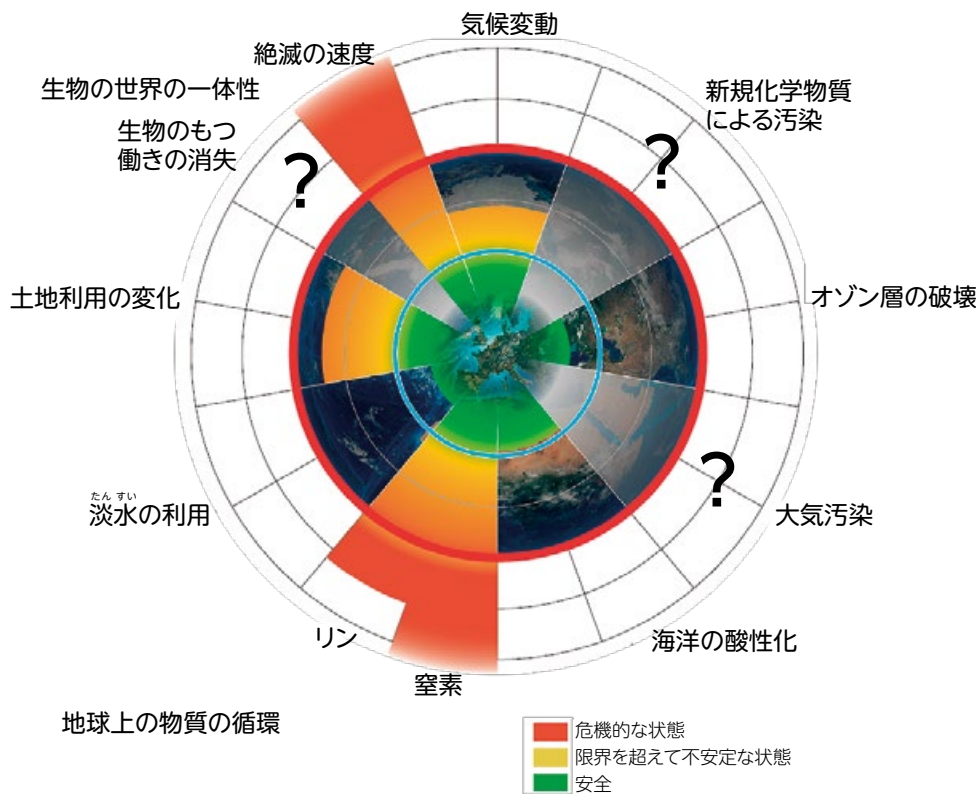
わたしたちの未来は大丈夫？

世界人口は70億人を突破し、2050年には98億人に達すると予測されています。人口が増えれば増えるほど、人間の活動による地球環境への負担が大きくなっていきます。わたしたちが大人になるころ、地球はどうなってしまうのでしょうか。そして、地球上に住んでいる人たちは、どうなってしまうのでしょうか。

地球の限界

2015年、人間の活動が地球環境におよぼす影響を評価した研究が発表されました。この研究では、地球環境の維持に不可欠な9つの分野を分析し、どれだけ危機的な状況かを示しています。

例えば、世界の人口が増加する中、農作物の収穫量を上げるために肥料を大量に使うようになった結果、肥料の成分(窒素やリンなど)の一部は農作物に取りこまれますが、多くは土に残ったり、川や海に流れ出したりします。これによって川や海の水質が悪化し、漁業などに悪い影響をあたえる場合があります。その結果、窒素やリンについては、地球がたえられない負荷の許容量をこえている、と考えられています。このように、人間社会を便利に、豊かにしようとして使ったものが原因で環境が悪化し、結果的に人間社会に悪い影響をもたらすということが実際に起きています。また、その悪い影響は取り返しのつかないことになるかもしれないのです。



資料：Will Steffen et al. (2015) 「Guiding human development on a changing planet」

実際に起こっている地球の変化

人間活動の影響で、地球環境にはどのような変化が起きているのでしょうか。

地球温暖化

地球全体の平均気温が上がることを「地球温暖化」といいます。地球温暖化が進むと、今までにないレベルの猛暑や大雨などの異常気象が増加するなど、世界中の自然や暮らしに様々な影響が出ます。

2017年は、アジアで50℃を超える気温、カリブ海や大西洋で相次いで発生した記録破りのハリケーン、アフリカをはじめ世界中で数百万人に被害をおよぼした壊滅的な雨季の洪水、さらには東アフリカの絶え間ない干ばつなど、世界各地で多くの異常気象が起きました。

- ハリケーン「イルマ」があたえた壊滅的被害



資料：UN Photo/Rick Bajormas

生物の絶滅

生命が地球に誕生して以来、生物が大量に絶滅する「大絶滅」が5回あったと言われています。現在は「第6の大量絶滅時代」と呼ばれており、過去の大絶滅と比べて絶滅の速度が速く、その主な原因は人間の活動による影響であると言われています。

- ライオン
人間活動による生息地の減少などが原因で、その数を減らしている。



資料：環境省

森林の減少

世界の陸地の面積の約3割を占める森林が徐々に消えています。伐採などにより、1990年からの25年間で、日本の面積の3.4倍にあたる約1億2,900万ヘクタールの森林が世界で減少しています。

- 森林伐採の様子



資料：熱帯林行動ネットワーク

世界の国々が力を合わせ、

地球の危機は一人の力や一つの国だけでは解決できません。全世界が心を一つにして問題に取り組んでいく必要があります。世界はこの危機をどのように乗りこえようとしているのでしょうか。

持続可能な開発目標 (SDGs)

人間活動が生じる様々な問題に国際社会が協力して取り組むため、2015年9月の国連総会で「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。これは、すべての国が共に取り組むべき目標で、その中に「持続可能な開発目標 (SDGs)」として2030年までの17の目標 (ゴール) が設定されています。SDGsの目標はそれぞれ連関しているので、一つの課題解決の行動により、複数の課題解決を目指すことも可能であり、環境のみではなく、環境・経済・社会のつながりを考え、ともに解決していくことが大切になります。



資料：国連広報センター

コラム セヴァン・カリス＝スズキさんのスピーチ

1992年、ブラジルのリオデジャネイロで「環境と開発に関する国連会議 (地球サミット)」が開催されました。この時、12歳の少女が壇上へ上がり、怒りに心を震わせて大人たちに訴えかけました。

「直す方法を知らないのなら、地球をこわし続けるのはやめてほしい。犠牲になるのは、わたしたち子どもの未来です」と語ったそのまっすぐな姿は、集まった人たちだけでなく、世界中の人々の心を大きく動かししました。

壇上でスピーチをするセヴァンさん



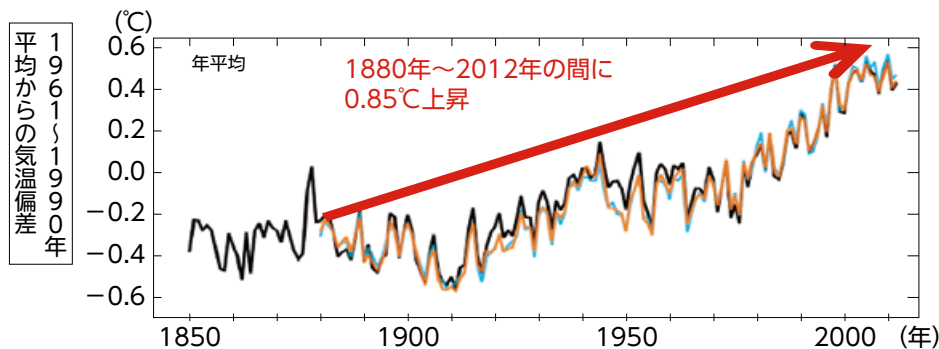
資料：ナマケモノ倶楽部

危機に立ち向かう

パリ協定

2015年12月、「パリ協定」という、地球温暖化に関する国際的な約束事が取り決められました。パリ協定は、地球温暖化の原因となる「温室効果ガス」の排出量の削減に向けて、先進国・開発途上国の区別なく、国ごとに目標を決めるとともに、目標達成に向けて取り組むことを取り決めた約束です。19世紀後半の産業革命からの世界全体の平均気温の上昇を、2℃より十分に下回るようにすること、そのために、今世紀後半には人間活動による温室効果ガスの排出を吸収と等しくし、実質ゼロにすることを目指しています。これは、石炭や石油などの化石燃料をできるだけ燃やさない社会へ変えなければならない、ということの意味しています。

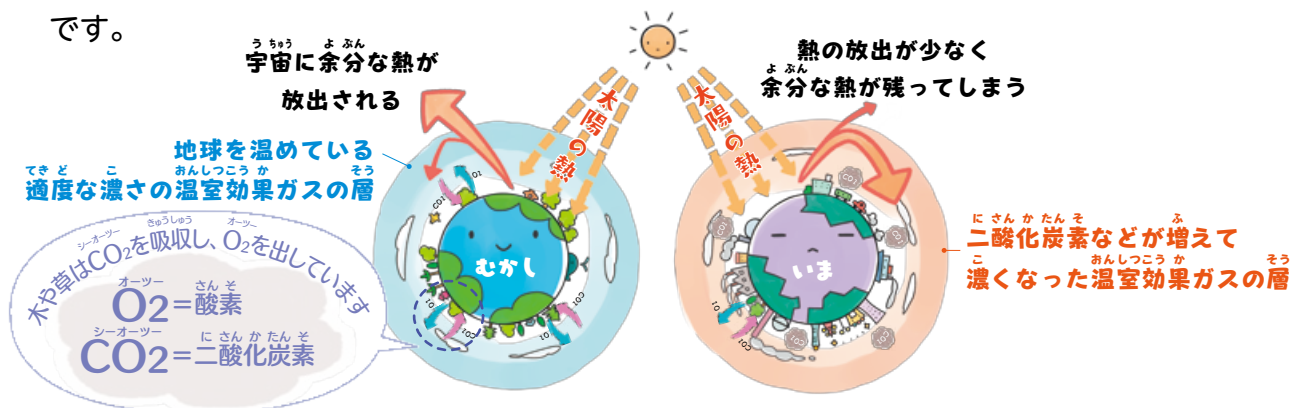
● 世界平均地上気温の変化



資料：気候変動に関する政府間パネル（IPCC）「第5次評価報告書統合報告書政策決定者要約」

温室効果ガスとは？

地球の表面から出る熱を吸収して温度を保つ性質を持つ「温室効果ガス」の増加が、地球温暖化の主な原因と考えられています。日本の排出する温室効果ガスの90%以上は炭素を含んだ物を燃やすと出てくる二酸化炭素です。技術革新が進んだ産業革命以降、発電や移動のために、化石燃料を燃やすようになった暮らし方の変化が、地球温暖化に結び付いているといえます。二酸化炭素以外に、代替フロン※1と呼ばれる物質も温室効果ガスの一種です。



※1：一部の冷蔵庫やエアコンなどに使われている物質で、二酸化炭素の150～1万倍の温暖化効果があり、国際的な取り決めにより、将来的な生産量・使用量の削減が義務づけられることになった。

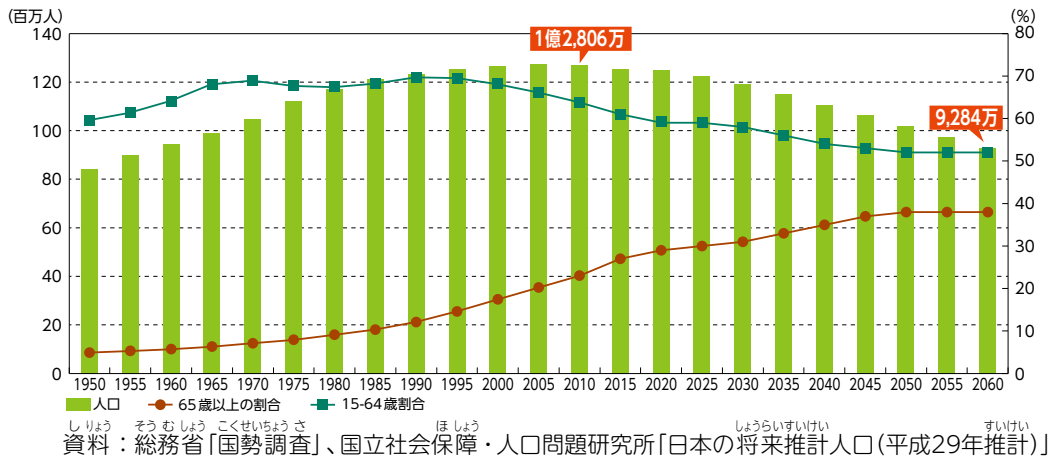
今、日本で何が起こっている

世界では、環境・経済・社会のからみ合った問題の解決に向けて様々な動きが始まりました。日本も世界の一員として取組を進めていますが、その前に、日本ではどのような問題が起こっているか考えてみましょう。

人口減少・少子高齢化

日本では、経験したことのない「人口減少」、子どもに比べて高齢者の割合が増えていく「少子高齢化」が進んでいます。2060年には人口は約9,000万人に、また約5人に2人が65歳以上になると推計されています。人口減少と少子高齢化がともに進むと、働き盛りの人の数が少なくなり、経済へ影響が生じると考えられています。

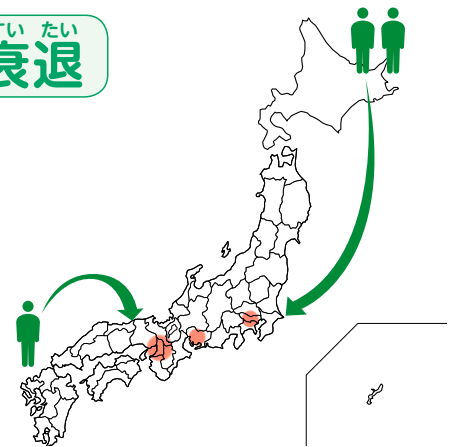
●人口と高齢化率



大都市圏への人口集中・地方の衰退

東京、名古屋、大阪といった大都市圏には、日本の人口の約半分が集中しており、特に東京周辺への人口集中が加速しています。

一方、大都市圏以外の地域では、人口減少による地域産業の衰退、担い手不足による様々な文化の伝承の危機などが大きな課題となっています。



多発する気象災害

2018年7月、台風や梅雨前線の影響により大雨となりやすい状況が続いたため、西日本を中心に多くの地方で観測記録を更新する大雨となり、各地で甚大な被害が発生しました。

近年、大規模な気象災害が多発しているのは、地球温暖化がその一因とも言われています。

●平成30年7月豪雨

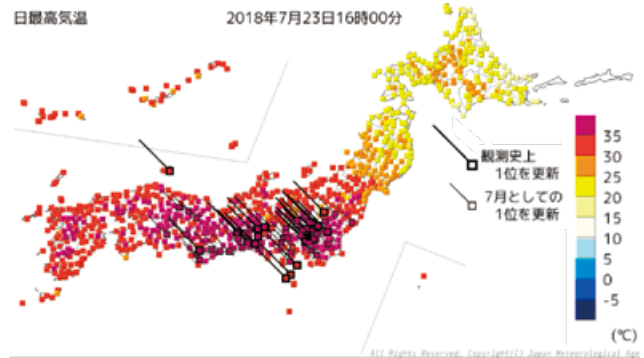


資料：国土交通省九州地方整備局

気温上昇

地球温暖化は、日本も例外ではありません。日本の2017年の平均気温は20世紀の平均から0.86℃高くなっています。2018年の夏は、7月に埼玉県熊谷市で日中の最高気温が歴代全国1位の41.1℃に達するなど、記録的な高温となり、7月16日から22日までの1週間で熱中症により全国で前年の同時期に比べて約3倍の23,191人が搬送される異常事態となりました。

● 2018年夏の記録的な高温(例)



資料：気象庁

コラム 2100年未来の天気予報

環境省では、現状を上回る温暖化対策をとらなかった場合の予測に基づき、「2100年未来の天気予報」という動画を作成しました。この動画では、2100年の天気予報として、例えば、東京の最高気温が44℃以上になると予想しており、局地的な大雨や干ばつなど、温暖化に伴う影響についても解説しています。



資料：環境省

● 2100年未来の天気予報【全国版】

<https://ondankataisaku.env.go.jp/coolchoice/topics/20180820-01.html>

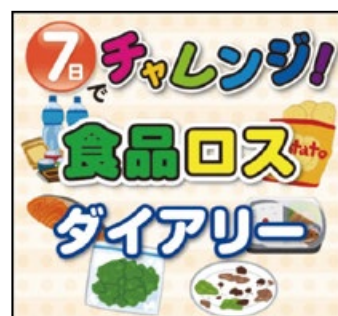


ごみ・食品ロスの問題

日本でのお店や職場、家庭からの1年間のごみの総排出量は4,398万トンです(2015年)。このうち、お店や職場、家庭から出るごみの10分の1に当たる435万トンは廃プラスチックと推計されています。また、お店での売れ残りや家庭での食べ残しなどの本来食べられるはずの食べ物のごみ(食品ロス)だけで1年間に646万トン、国民1人1日当たり約140グラム(およそお茶碗1杯分)発生しています。

● 食品ロスダイアリー

身の回りの食品ロスの量を調べてみよう!



資料：環境省

ダウンロードはこちら!



わたしたちの身のまわりの自

世界や日本で様々な環境の変化が起きていること、それに対し、SDGsやパリ協定という、世界全体の約束事が決められ、それらに向けてみんなが行動していることが分かりました。では、わたしたちの身のまわりの自然では何が起きているのでしょうか。

森の手入れが進まない

スギやヒノキなどの人工林は、定期的に間引きや伐採をしないと荒れてしまいますが、林業の不振で担い手が減り、管理が十分に行われない人工林が増えていきます。そのような人工林は、貯水機能が低下して土砂くずれが起こりやすくなり、生態系のバランスもくずれてしまいます。



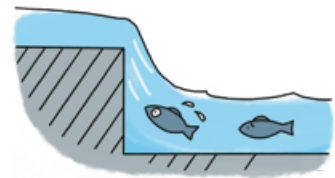
田畑や町にシカやイノシシが出てきて困っている

農作物が作られなくなった田畑はやぶになっていき、シカやイノシシにとって、食事をしたり隠れたりしやすい場所になります。こういった場所が増え、シカやイノシシが田畑を荒らしたり、山から町に下りて来たりするため、わたしたちの暮らしがおびやかされています。



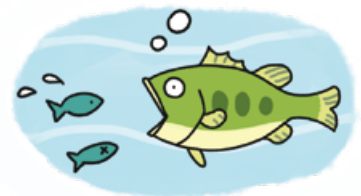
魚がすみにくい川になっている

災害防止のためにダムや堰がつくられ、護岸もコンクリート化されました。川と海を行き来する魚にとって、すみにくくなってしまいました。最近では、これらの魚の通り道を確保したものもありますが、以前よりすみにくくなっていることは間違いありません。



外来種が増えている

人が持ちこんだ外来種が、地域に元からいた生物を食べたり、すむ場所や食べ物をうばったりすることで、地域の固有の生態系がおびやかされています。



然では何が起きているの？

自然の中で遊ぶ子どもがいない

子どもはいのちの不思議や暮らしの成り立ちを、森・里・川・海をかけ回って知り、仲間とのきずなを深めるものです。子どもの安全はもちろん重要ですが、子どもが自然体験から学ぶことも多いはずです。



魚や貝、海藻が減っている

干潟や砂浜の埋め立て、ダムや堰による川から流れこむ栄養分の減少、地球温暖化による海水温の上昇などが原因で、食卓に欠かせない魚や貝、海藻が減っています。代わりに、海にはごみが目立つようになってきました。



コラム 海洋ごみとマイクロプラスチック

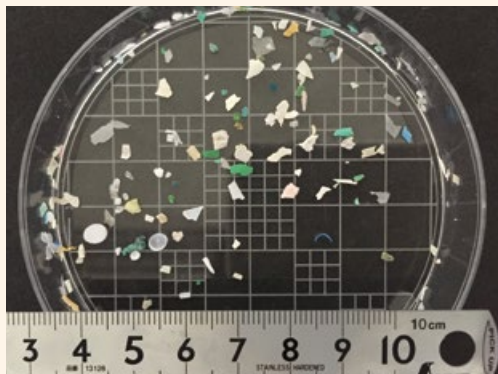
近年、海岸へ漂着したり、海に漂う海洋ごみが問題となっています。海洋ごみにはプラスチックが多くふくまれており、海洋の環境や観光・漁業などの経済活動へ影響をあたえています。また、中にはマイクロプラスチックと呼ばれる5ミリメートル以下のプラスチックも増えており、動物が飲みこむなど、生態系へ影響をあたえるとともに、海産物を通じて人の体に取り込まれ人体に影響を与えることが心配されています。

● 海岸に漂着した海洋ごみ



資料：岡山県

● マイクロプラスチック



資料：九州大学 磯辺研究室

ゆた 豊かな暮らしを続けるために

未来まで続く豊かな暮らしを実現するためには、どのような考え方が必要か、考えてみましょう。

わたしたちの暮らしを支えるもの

わたしたちの暮らしに欠かせないきれいな空気、豊かな水、食料や資材などは、実は、森・里・川・海がつながることで生み出される「自然のめぐみ」なのです。自然のめぐみは、自然が保たれることで得られる大切な資源であり、わたしたちの暮らしを支えています。

例えば、「森」では、木が光合成により酸素をつくり、きれいな空気が生まれます。森のやわらかい土が雨を吸収して「川」にゆっくり流れていくため、洪水や水不足が起きにくくなります。森から流れ出た水には、栄養分がたくさん含まれており、「里」の水田や畑にも流れて農作物を育て、魚が行き来します。「海」までたどり着いた栄養分は、魚や貝、海藻を育てます。森・里・川・海はそれぞれがめぐみを生み出し、お互いのつながりが、そのめぐみをより大きく育てます。

しかし、行き過ぎた開発や手入れ不足などによって、そのつながりが急速に失われつつあります。このままでは、動植物などの身近な資源がなくなり、森林や里地里山が荒れていってしまいます。

そんな中、わたしたちにできることは、自分たちの暮らし方は今のままでいいのか、一度ふりかえてみることです。



これまでの暮らしをふりかえってみよう

かつて、人類は暮らしに必要なすべてのモノを、地上にある自然のめぐみから受け取っていました。しかし、工業化の発展により、地下にある化石燃料や様々な資源がたくさん使われるようになりました。そして、いつからか身のまわりを快適にするために、自分に都合よく資源を消費し、自然にあまり配慮せずに土地を開発するようになりました。

このまま、身のまわりの自然から目をそらして、何も考えずに資源を使い続けられれば、自然のめぐみは失われ、いつかは世界中の資源を使い果たし、今のように豊かな暮らしができなくなってしまいます。

それでは、自然のめぐみを回復し、資源を使い果たすことなく、いつまでも豊かに暮らす方法はあるのでしょうか？

この問題を解決するヒントは、「持続可能」という言葉と「環境・経済・社会の問題はつながっている」ということにあります。

コラム 「持続可能である」とは？

「持続可能である」とは、今の地球環境が保たれて、未来まで続くということです。すなわち、現在のわたしたちだけでなく未来の人たちも豊かに暮らすことができる状態である、ということです。現在、人間の活動によって地球の回復力を大幅に上回る影響を地球環境にあたえていると言われていています。わたしたちの子どもや孫も豊かに暮らすためには、地球環境を守り、受け継いでいく必要があります。

持続可能な一人ひとりの行動

流しそうめんを例えると…



持続可能な社会に向けた地

50年後、100年後も豊かな暮らしを送るような持続可能な社会を目指すにはどのようにしたらよいか、考えてみましょう。

地域の資源を活用した地域づくり

世界中が持続可能な社会となるためには、日本をはじめとする世界各国が、そして、日本の各地域が持続可能な社会となる必要があります。

地方には、豊かな自然やそこから得られる自然のめぐみ、農山漁村の伝統文化や田園風景などの様々な「資源」があります。都市には、人材やお金、都市ならではの文化、都市の景観などの様々な「資源」があります。つまり、その地域のもつすべてのものが資源だと考えられます。

各地域に目を向けてみると、その地域が持つ様々な資源があることがわかります。各地域が持続可能であるためには、人やモノ、お金といった、各地域が持っている様々な資源を、できるだけ地域の外に出さずに、それぞれの地域の中で循環させ、経済・社会活動においてそれらを最大限に活用することが必要です。こうした循環は、地域の経済・社会を元気にし、環境だけでなく、経済・社会の課題の解決に役立つとともに、各地域の自立にもつながると考えられます。



資料：静岡県藤枝市



域づくり

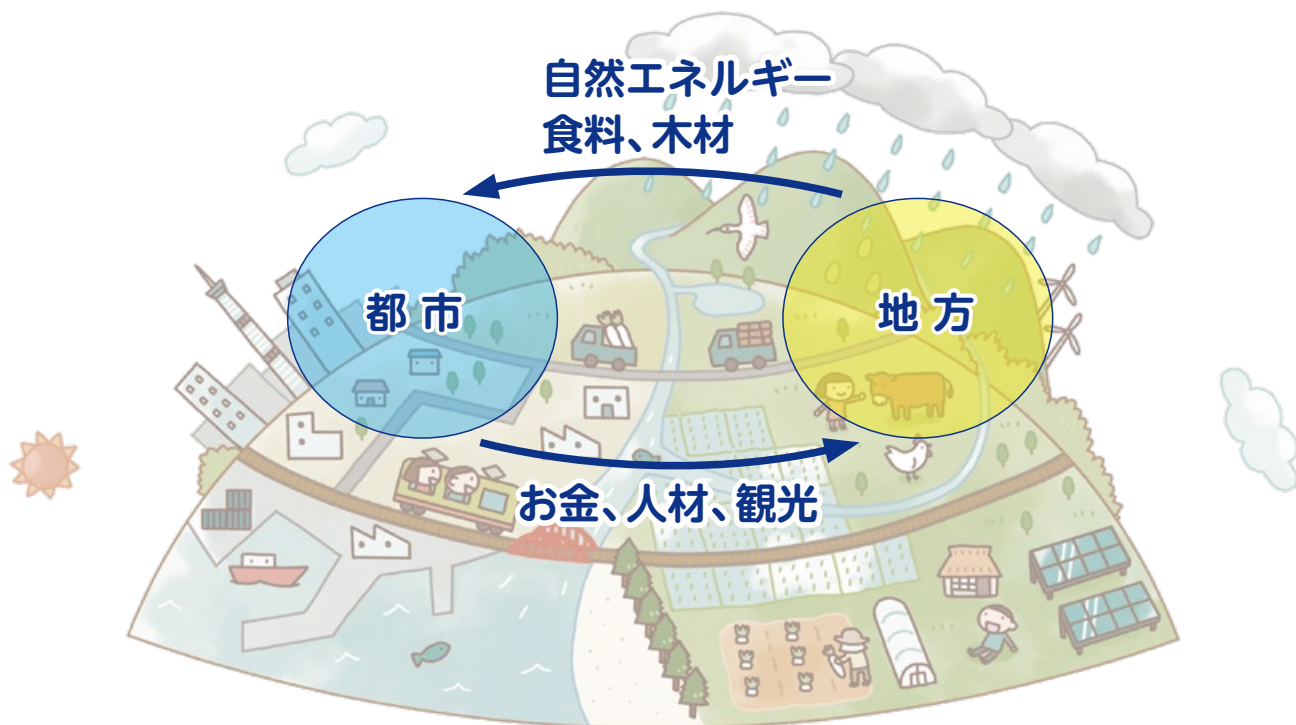
さらに、それぞれの地域は周辺の地域どうしで支え合うことが重要です。

例えば、河川の流域内の人々は互いに、河川の水やその水を育む森林などの森里川海のつながりを守り、そのめぐみを分かち合うことで、豊かな暮らしを維持してきました。将来にわたって自然のめぐみを受け続けるためにも、流域全体で広域的に地域どうしの連携をすることが重要です。

特に、都市と地方はお互いにはないものを持っているため、地方で作ったエネルギーを都市で使う、地方の自然の恩恵を受けている都市で働いていた人がその能力を生かして地方ならではの仕事を始める、都市の住民が地方での自然保全活動に参加するなど、いろいろな形で支え合うことができます。

このように、環境対策で地域を元気にするような取組が行われている圏域を「地域循環共生圏」と言います。

そして、人間も自然の一部です。地域資源を生み出すもとなる自然と対立するのではなく、自然と共に暮らし(共生)ながら地域資源を活用(循環)していくことは、結果として無駄がなく、効率的で温室効果ガスも減らす仕組みづくりにつながります。このような仕組みは、生きものの世界の仕組みに学ぶところも多く、これが進んだ持続可能な社会を「環境・生命文明社会」と言います。



わたしたちのまわりにある地

持続可能な地域づくりをしていくためには、わたしたちが住んでいる地域の資源を上手に活用することが大切です。わたしたちが住んでいる地域の資源を探してみましよう。

自然が生み出すもの

よく考えてみると、わたしたちの生活は、自然のめぐみによって支えられています。きれいな空気、豊かな水、食料や資材、自然の上に成り立つ独自の文化やわたしたちをリフレッシュさせてくれる美しい景観など、自然のめぐみの種類は数えきれません。

こうした自然を象徴するのが、森・里・川・海です。森・里・川・海はお互いにつながり、影響し合ってめぐみを生み出しています。しかし、行き過ぎた開発や手入れ不足などによって、そのつながりが絶たれたり、それぞれの質が下がったりしています。自然のめぐみを地域の資源として活用し、その地域ならではの文化や風土に学びながら、地域における魅力の再発見と豊かな暮らしの実現につなげていくためには、森・里・川・海が健全な状態でつながっていること、昔の知恵と技に最新の技術を組み合わせ、森・里・川・海が持つ力を活かしていくことが必要です。

コラム 伊勢志摩国立公園「天空カフェテラス」

伊勢志摩国立公園では、英虞湾の景色をゆっくり楽しむことができるよう、横山展望台に「天空カフェテラス」を新しく整備しました。カフェでは、この土地ならではの食の体験ができます。また、海外からの旅行者により楽しんでもらえるよう、展示の多言語化などの工夫も進めています。今後も世界中の旅行者をひき付ける取組を推進していきます。

● 伊勢志摩天空カフェテラス全景



資料：環境省

● 伊勢志摩国立公園

<http://www.env.go.jp/park/iseshima/>



● 伊勢志摩国立公園全体図



資料：環境省

いき 域の資源 し げん

自然エネルギー(再生可能エネルギー)

石油や石炭など、エネルギーを作るための化石燃料は、ほとんどを海外から輸入しています。わたしたちのまわりにあるものから、エネルギーを作ることはいまできるのでしょうか？

わたしたちのまわりには、太陽光、風力、水力、木質バイオマス、廃棄物エネルギー、地熱、温泉熱など、一度利用しても短期間で再生が可能な「再生可能エネルギー」と呼ばれるエネルギーがあります。この中でも、太陽光を中心にその活用にかかる費用は急速に安くなっており、世界的に普及が進んでいます。日本の再生可能エネルギーは国全体で必要なエネルギーの約1.8倍もあると推計されており、上手に活用していくことが大切です。

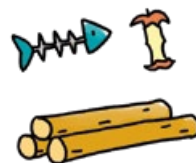
太陽光発電

日光がよく当たる場所などにソーラーパネルを置き、太陽光の力で発電します。



バイオマス発電

木くずなどの生物の資源(バイオマス)を使って発電します。



風力発電

風が風車を回す力で発電します。海の上で行う海上風力発電もあります。



廃棄物エネルギー

廃棄物を利用して発電します。発電の時に出る熱も利用します。



地域の資源は「お互いさま」

都市には人とお金が集まりやすい一方で、地方には食料、水、木材といった資源やエネルギーが存在します。こうした人やお金、資源、エネルギーなどが循環することで、お互いに必要としているものを補い合い、支え合うことができます。こうした地域間のつながりを、都市と地方だけでなく、様々な地域どうしが築いていくことが必要です。



変わりつつあるわたしたちの

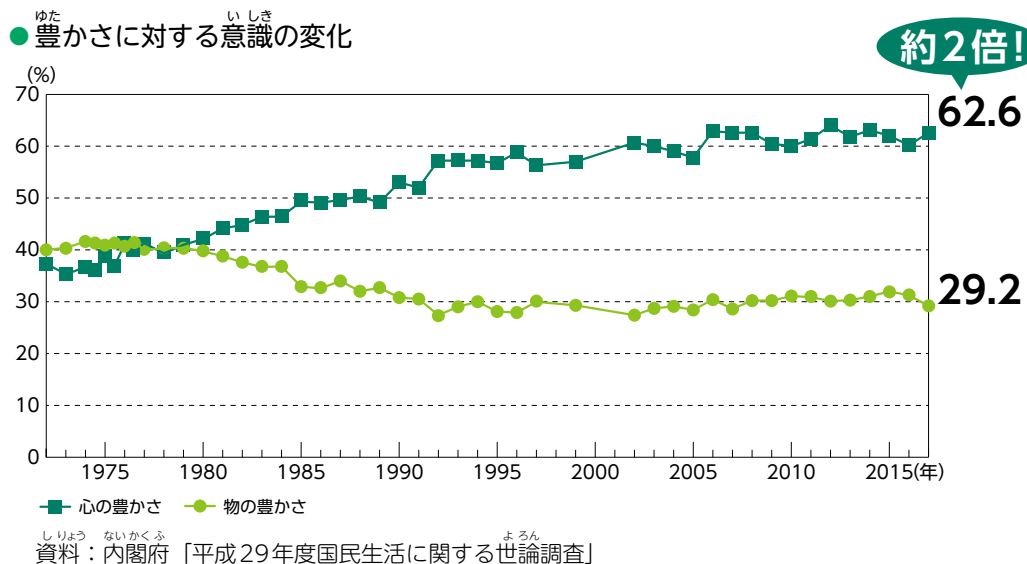
わたしたちのモノやサービスの購入、エネルギーや資源の使用は、地球環境に大きな影響をおよぼしています。そのため、持続可能な社会づくりをしていくためには、わたしたち一人ひとりの暮らし方を変えていく必要があります。

日本人の意識の変化や、環境を考えた持続可能な行動を考えてみましょう。

豊かさに対する意識の変化

日本では1960年代以降、経済が急速に発展し、多くの人々が便利で快適な生活を送れるようになりました。その一方で、「豊かさ」に対する意識は大きく変化してきました。

かつては「心の豊かさ」より「モノの豊かさ」を重視する人の方が多かったですが、近年は「心の豊かさ」を重視する人の割合が「モノの豊かさ」を重視する人の約2倍となっています。



コラム 世界で最も貧しい大統領

ウルグアイのホセ・ムヒカ元大統領は、その質素な暮らしぶりから、「世界で最も貧しい大統領」と呼ばれていました。2012年、ブラジルのリオデジャネイロで開催された「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」において、わたしたちのライフスタイルを見直すべきとしたスピーチを行い、世界から大きな注目を集めました。

- リオ+20におけるホセ・ムヒカ大統領のスピーチ



資料：UN Photo

暮らし方

モノは所有から共有へ

近年、個人等の所有物や技能を、インターネットを通じて共有する「シェアリング・エコノミー」という取組が進んでいます。モノや空間などを共有することで、資源を効率的に活用し、ごみの発生量、温室効果ガス排出量の削減といった環境保全の効果が期待されています。

コラム 自転車シェアリング

株式会社ドコモ・バイクシェアでは、環境に配慮した自転車シェアリングサービスを全国で展開しています。スマートフォンなどで手軽に貸出手続きができて、複数のポート（専用の自転車置き場）でどこでも自転車が貸出・返却できることから、利用が進んでいます。自転車シェアリングは、温室効果ガスの排出量の削減や資源の有効利用のほかに、地域の活性化などにも貢献しています。

- ドコモ・バイクシェアの自転車と自転車ポート



資料：株式会社ドコモ・バイクシェア

暮らしの考え方をちょっと変えるだけで

暮らしの考え方を少し変えることで、様々な環境を維持する効果が期待できます。

例えば、食べ物を必要な分だけ購入して食べ切れれば、食べ物という資源を有効活用するだけでなく、食べ残しを運ぶための燃料の削減、食べ残しの処理で発生する温室効果ガスの削減といった効果も期待できます。また、最近注目されている「オーガニック」についても、生物多様性の保全に役立つものであるだけでなく、他の様々なメリットにもつながり得ることから、有機農業にとどまらず、衣・食・住にわたるライフスタイルを全体的にとらえるものとして考えることもできます。

このように、社会全体を持続可能にするためには、一人ひとりの考え方を変えていくことが重要です。



地域づくりに向けたみんな

資源の循環に関する取組

食品ロス削減に役立つレシピ

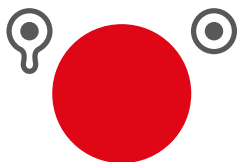
食品ロスの削減に向けて、国では「食品ロス削減国民運動(NO-FOODLOSS PROJECT)」を展開しています。この一環として、食品の生産から販売までの各段階における食品ロス削減の取組を推進しており、例えば、包装内を窒素で満たすことによる品質保持、食べきりの呼びかけなどに取り組んでいます。

2013年度には、消費者庁が食品ロスの削減に向けて、先進的な取組を行う地方公共団体の支援を行ったところ、多数の「食材をむだにしないレシピ」が消費者庁に寄せられました。これらのレシピを各地方の郷土料理の紹介などと一緒により多くの人に伝えるために、料理レシピサイト「クックパッド」で紹介しています。

また、2018年8月からはクックパッド株式会社が「クリエイティブ・クッキング・バトル」という対戦トーナメント形式のイベントを開催しています。余った食材で工夫をして、自由においしい料理をつくる能力に焦点を当てたイベントで、楽しみながら食品ロス対策に必要な考え方に気づいてもらうことを目指しています。

これまで捨てていた野菜の皮や茎も、冷蔵庫に残った半端な野菜や余った料理も、捨てる前にレシピを探したり、考えてみたりしてください。捨てていたものから、おいしくて地球と家計にやさしい料理ができるかもしれません。

●食品ロス削減国民運動のロゴ



食べものに、
もったいないを、
もういちど。

NO-FOODLOSS PROJECT

資料：農林水産省

●クリエイティブ・クッキング・バトルの様子



資料：クックパッド株式会社

の取組

自然資源を利用した取組

コウノトリと共に生きる(兵庫県豊岡市)

かつて日本各地で見られたコウノトリは、生息環境の悪化により数を減らし、1971年に日本の空から姿を消しました。兵庫県豊岡市では、絶滅する少し前からコウノトリを守ろうと、1965年に人工飼育を始め、1989年には待望の人工繁殖に成功し、2005年、再びコウノトリが日本の空を舞いました。現在では、野外でもヒナが誕生しており、100羽をこえるコウノトリが同市を中心とした野外で暮らしています。

コウノトリは水田などの湿地でカエルやドジョウなどを食べて暮らすことから、野外で暮らしやすい環境をつくるために、2003年からは、農薬や化学肥料にたよらない「コウノトリ育む農法」を始めました。この農法で栽培された米は、一般的な農法に比べて1.3倍から1.6倍の価格で買い取られており、農家の収入の増加につながっています。環境を良くする取組により経済が活性化し、それがもととなってさらに取組が広がるという、環境と経済が共に影響し高め合う関係ができ上がっています。

地元の子どもたちも、生き物調査をはじめ、コウノトリの野生復帰の取組に参加しています。2017年度からは市内の全小中学校で「ふるさと教育」が始まり、コウノトリや地元の自然について学んでいます。こうした取組は、自分が生まれ育ったふるさとに対する愛着と誇りを育てることにつながっています。

● コウノトリと少年



● コウノトリ育むお米



● 子どもたちの生息地保全活動



資料：兵庫県豊岡市

再生可能エネルギーに関する取組

地元密着企業で地域を元気に(鳥取県米子市)

これまで、火力発電や原子力発電のように大規模で集中的に発電が行われていました。しかし、災害が起きてその設備が止まった場合、広い地域で大きな影響が出てしまいます。2016年に電力に関する制度が変わってからは、小規模で各地に分散した発電も行いやすくなりました。再生可能エネルギーは地域で作り、地域で使う「地産地消」に適したエネルギーのため、各地で再生可能エネルギーを使った小規模発電の取組が進められています。

鳥取県米子市では、生産したエネルギーをその地域で消費することで、地域のお金の流れを活性化させること、地域に働く場所を生み出すことなどを目的に、地元企業5社と共同で「ローカルエナジー株式会社」を2015年に設立しました。同社では、米子市やその周辺での廃棄物発電、太陽光発電、地熱発電などといった再生可能エネルギーで作られた電力を積極的に活用しています。

また、同社は、地域内に必要な電力量の予測を行って自社だけでは余ったり不足したりする電力を売買して調整し、電力がしっかり供給されているかを確認したりするといったことを自ら実施しています。これにより、地域の天気やイベント、学校の行事など地域の特性に合わせた最適な電力提供を可能とするとともに、地域に新たな仕事を生み出しています。

地域の再生可能エネルギー等を活用し、地域に密着して電気やガス等を供給する公的な企業をドイツでは「シュタットベルケ」と呼び、地域の活性化につながっています。米子市ではこのシュタットベルケに習い、地元密着企業で地域を元気にする取組が積極的に進められています。

● 廃棄物発電施設



資料：鳥取県米子市

● 太陽光発電施設



資料：シャープ株式会社

ち い き 地域のつながりを活かした取組

人と電気のつながりによる都市と農山漁村の交流

とうきょうとせたがやく ぐんまけんかわばむら (東京都世田谷区、群馬県川場村)

とうきょうとせたがやく ぐんまけんかわばむら せたがやく
東京都世田谷区と群馬県川場村の交流は、世田谷区が1981年に区民の第二のふるさとづくりを目的として川場村と協定を結んだことをきっかけにスタートしました。以来、せたがやく かわばむら はってん せたがやく
世田谷区と川場村の交流を発展させるため、世田谷区の小学5年生を対象に、かわばむら ゆたかな自然の中で農作業や登山、村巡りを行う移動教室や、かわばむら かんきょう
川場村の自然環境を区民・村民が協力して守り育てる活動などを行ってきました。

こうしたつながりがあり、自然エネルギーを介した新たな交流の発展として、2016年2月に自然エネルギー活用による発電に関する取り決めを結びました。かわばむら ちいき
川場村で新たに地域の森林資源を活用した木質バイオマス発電を立ち上げ、かわばむら
川場村で発電した電気を世田谷区民が購入するという仕組みをつくりました。ほとんどが住宅地であり、大規模な自然エネルギーを生み出すことが難しい世田谷区では、かわばむら
川場村との交流や自然エネルギーを通じたちいき
地域どうしの協力の仕組みが、他の市区町村にも広がるように取組を進めています。

● 林業体験の様子



● 農業体験の様子



● かわばむら 川場村にある発電所の見学ツアー



しりょう とうきょうとせたがやく ぐんまけんかわばむら
資料：東京都世田谷区、群馬県川場村

ライフスタイルを変えよう!

暮らし方の転換による取組

「希望の綿」ふくしまオーガニックコットンプロジェクト (NPO法人ザ・ピープル)

東日本大震災で大きな被害を受けた福島県いわき市では、東京電力福島第一原子力発電所事故による風評被害や農業の担い手不足などが原因で、手入れが行き届いていない畑が広がっていました。NPO法人ザ・ピープルでは、2012年から「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」を開始し、いわき市内など21か所の畑を活用して、農業や化学肥料にたよらない有機栽培(オーガニック)でコットンを育てています。栽培されたコットンは「希望の綿」と名付けられ、Tシャツなどの商品に加工して、インターネットなどを通じて販売しています。中でも注目されているのが、「コットンベイブ」という小さな人形です。人形の中に種付きのコットンが入っていて、「買った人は、それぞれの場所でコットンを育て、収穫した綿を送り返す」という試みを行っています。これらの取組を通じて、農業の再生や地域の活性化、仕事を生み出すことにより、福島県の復興に取り組んでいます。

モノを買うことは、未来を選ぶことにつながります。この取組のように、環境への負荷を減らして育てられたコットンの服などを選ぶことは、自然と共生し、豊かな社会を実現する力となります。

● いわきオーガニックコットン収穫祭



● コットンベイブ



● コットンでできた製品



資料：NPO法人ザ・ピープル

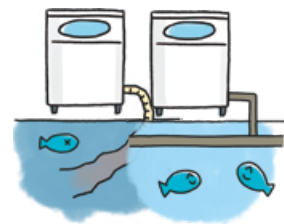
環境を維持していくには、一人ひとりの行動が必要です。自分でできることを探したり、周りの人と話し合ったりして、何ができるのか、考えてみましょう。



短い距離は歩くか、自転車に乗ろう



レジぶくろは断ろう



洗濯物の量などに合った正しい量の洗剤を使おう

他にもわたしたちにできることはいっぱい！調べてみよう！

●持続可能な社会のためにナマケモノにもできるアクションガイド

(国連広報センター:http://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/24082/)



グッドライフアワード

みんなの力で社会は変わる！みんなの力が社会を変える！

グッドライフアワードは、環境にやさしい社会の実現を目指し、日本各地の「環境と社会にいい暮らし」に関わる活動や取組を募集して紹介・表彰し、活動や社会を活性化するための情報交換などを支援していく環境省のプロジェクトです。

グッドライフアワードでは、「環境と社会にいい暮らし」を実現するための取組を募集しています。みなさんの取組についての情報を発信することで、日本で暮らす一人ひとりがライフスタイルを見直すきっかけになることを目指しています。

●表彰式の様子



資料：環境省

●第5回環境大臣賞

「つなげよう段ボールコンポストの輪」



資料：八王子市立式分方小学校

●グッドライフアワード

http://www.env.go.jp/policy/kihon_keikaku/goodlifeaward/index.html



みんなで行組を始めよう！

つなげよう、^{ささ}支えよう森里川海プロジェクト

わたしたちの暮らしを^{ささ}支える森里川海は、今もたくさんの課題をかかえています。しかし、大人も子どもも、都市も地方も、みんなで森里川海を^{ささ}支える社会をつくることができれば、森里川海からのめぐみはいつまでも生み出され、わたしたちは^{こころゆた}心豊かに^く暮らせるようになります。トキやコウノトリが舞う田んぼ、たくさんの魚が泳ぐ川や海、その中で遊ぶ子どもたち。そんな光景がどこにでも見られる“いのち^{かがや}輝く国”を目指して、楽しみながら行動を始める人が^ふ増えています。さあ、あなたも、この活動の輪に加わりましょう。

● 森林整備体験の様子



資料：環境省

● 屋上農園での栽培の様子



資料：環境省

● 森里川海

<http://www.env.go.jp/nature/morisatokawaumi/>



マイ^{こどうせんげん}行動宣言 MY行動宣言

たくさんの生き物が、近いうちに地球からいなくなると言われています。あらゆる生き物とのつながりの上に成り立つ、わたしたちの^く暮らし。まずは自分にできることを知り、楽しみながら行動してみる。それが、わたしたちの^{ゆた}豊かな^く暮らしと森里川海を^{ささ}支えます。

「MY^{こどうせんげん}行動宣言」では、今日からだれでも楽しめるアクションを紹介しています。次の5つのアクションの中からやってみたいものを選んでMY^{こどうせんげん}行動宣言し、今日から^{いっしょ}一緒に行動していきましょう！

生物多^た様性のためにできる5つのアクション



● ウェブからできる^{マイ}MY行動宣言

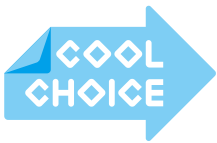
<http://undb.jp/spread-action/entry/>



クールチョイス COOL CHOICE

環境省では、地球温暖化対策のための国民運動「COOL CHOICE (クールチョイス)」を推進しています。「クールチョイス」は日常生活で使う「モノ」や「サービス」、「ライフスタイル」について、環境にやさしいものを選ぶことを推進する取組です。その取組の中には、地球のことを考えて冷房の温度を設定する「クールビズ」、宅配便を1回で受け取る「COOL CHOICEできるだけ1回で受け取りませんかキャンペーン」などがあります。

- COOL CHOICEイメージキャラクター
- 宅配ボックス利用の様子



賢い選択



資料：環境省



資料：Packcity JAPAN、ヤマト運輸

COOL CHOICE

<https://ondankataisaku.env.go.jp/coolchoice/>



リスタイル Re-Style

環境省では、資源が循環する社会(循環型社会)のライフスタイルを「Re-Style (リスタイル)」として、全国で取組を推進しています。この取組では「限りある資源を未来につなぐ。今、僕らにできること。」をテーマに、3 R (リデュース、リユース、リサイクル)や資源の大切さを知ってもらうため、幅広い情報を発信しています。また、毎年10月を3 R推進月間と決めて、様々なイベントを開催して、資源の循環利用が広まるよう、活動をしています。

Re-Style

<http://www.re-style.env.go.jp/>



プラスチック・スマート

ポイ捨てなどにより、回収されずに海に流れ込む「海洋プラスチックごみ」が日々発生しています。「海洋プラスチックごみ」はいつまでも海に残り、このままでは2050年までに世界中の魚の量を上回ると予測されています。

この問題の解決には、不必要なワンウェイ(使い捨て)のプラスチックを使わないなど、プラスチックと賢く付き合っていくことが重要です。環境省では、そうした取組を応援し、さらに広げていくため「プラスチック・スマート」キャンペーンを実施しています。

プラスチック・スマート

<http://plastics-smart.env.go.jp/>



おねりに

ゆたかな未来を想像してみよう！

ゆたかな未来とはどのような未来なのでしょう？

わたしたちのゆたかな未来について、地域や国がどのように変わって行くか、
かんきょう・けいざい・社会がどのように調和していくか、思い描いてみましょう。

例えば

未来の社会は
どうなっているだろう？

みんなはどんな暮らしを
しているだろう？

自然は
どうなっているだろう？

わたしたちの出すごみの量は
どうなっているだろう？

気温は
どうなっているだろう？

エネルギーはどこから
手に入れているだろう？

など

「こども環境白書」を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

今のままの暮らしを続けていると持続可能な社会に遠くなってしまいます。初めからすべてを良くしようとするのは難しいですが、あなたの好きなことや興味のあること、今取り組んでいることについて、少し発想を変えるだけで環境保全へとつながっていくかもしれません。

環境保全に絶対の答えは存在しません。大人もどうすれば良いのか、常に悩んでいます。みなさんにはみなさんにできる方法で問題解決へつながるやり方があると思います。自分に合った方法を探してみてください。それが持続可能な社会への第一歩となります。

本書を読むことが、みなさんの考え方を考える手助けになれば幸いです。



この冊子の目的と使い方

(教師・保護者のみなさまへ)

「こども環境白書」は、子供も大人も、みんながESD※の視点から気づき、考え、行動を変えていくためのツールです。

ESDとは、世界の人々や、地球上の生き物、そしてこれから先の未来のことも考えて、みんなが幸せに暮らしていける地球にしていくために、**私たち一人ひとりが気づき、主体となることができることを考え、行動するための学び**です。そして、ESDでは、学校教育だけでなく、日常の経験、家庭、職場、遊びなど、“すべての場が学びの場”となります。また、子供からお年寄りまでの“すべての人が学ぶ人”となります。

ESDの視点で捉える

(持続可能な社会で大切なことを理解する)
－捉え方の例－

多様性 いろいろある



自然・文化・社会・経済は、多種多様な事物から成り立っています。そうした多様性を尊重するとともに、事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切です。

相互性 関わり合っている



自然・文化・社会・経済は、互いに働き掛け合うシステムであり、人もそれらとつながりをもち、人同士も関わり合っ互いに作用していることを認識することが大切です。

有限性 限りがある



自然・文化・社会・経済を成り立たせている環境要因や資源は有限であり、それらに支えられた社会発展には限界があることを知るとともに、将来世代のために有効に使用していくことが大切です。

公平性 一人ひとり大切に



持続可能な社会の基盤は、一人ひとりの人権や生命が尊重されることです。権利の保障や恩恵の享受は公平である必要があり、地域や世代を超えて保持されることが大切です。

連携性 力を合わせて



持続可能な社会の構築・維持には、多様な主体の連携・協力が不可欠であり、意見や立場が違って、適宜順応・調和を図りながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切です。

責任性 責任をもって



持続可能な社会を構築するためには、一人ひとりが責任と義務を自覚し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンを持って、他人任せにせず自ら進んで行動することが大切です。

本冊子には、自ら「気付く」ためのきっかけが多く含まれています。「気付く」ことで、自ら考えて「行動」ができるようになります。環境だけではなく、開発、平和、国際理解等、文化面や社会面も含めて、持続可能な社会を構築できるよう、私たち一人ひとりの行動を見直して変えていくことがESDの目的であり、そのために本冊子をお役立てください。

※ESDはEducation for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)の略称です。

ESDの視点で工夫する (問題解決に必要な能力・態度を身に付ける) －工夫の例－

批判 批判的に考える力



合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力。

未来 未来像を予測して計画を立てる力



過去や現在に基づき、あるべき未来像(ビジョン)を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力。

多面 多面的、総合的に考える力



人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり(システム)を理解し、それらを多面的、総合的に考える力。

伝達 コミュニケーションを行う力



自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力。

協力 他者と協力する態度



他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度。

関連 つながりを尊重する態度



人・もの・こと・社会・自然など自分とのつながり・かかわりに関心をもち、それらを尊重し大切にしようとする態度。

参加 進んで参加する態度



集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに主体的に参加しようとする態度。



こども環境白書 (平成31年1月発行)

発行 環境省 大臣官房環境計画課企画調査室
〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2 TEL 03-3581-3351(代)
<http://www.env.go.jp/>

制作 株式会社ドゥ・アーバン
〒153-0042 東京都目黒区青葉台2-21-6 TEL 03-5724-5921(代)